



ング形式』にある」と言います。その背景には、自律的で協働的な学習者として子どもが自立していくことを促したいという意図があります。

放課後プログラミングクラブでは毎回、設けられたテーマに沿って、子どもたち自身で活動を行います。もしわからないことがあれば、周りの子やスタッフにチャットやマイクで聞くなどし、教えあったり発表しあったりしながら活動。一方で、その日のテーマにあまり興味がない子は、自分の好きなことをして過ごすこともできるのだそうです。こどもの特性やその子のやりたいことに合わせて、たとえば「初心者エリア」「その日のテーマに取り組むエリア」「読書・YouTube・工作・宿題など自由に過ごせるエリア」「話しかけない、静かなエリア」といったように、エリア分けされたメタバース空間で、自由な活動の中でできるだけ気が合う子ども同士が集まれるように設計されています。

マイクの声は同一エリア内のみ聞こえるようになっており、マイクやカメラのON/OFFも自由。「どんな子ども心地よいと感じられる状態で参加できるオンラインの居場所を目指しているのです。」(石川氏)

### サード・プレイス立ち上げのきっかけ

プログラミングやITを学びたいと願うすべての子どもたちが学べるようにしたい。そんな思いから、2016年に「Kids Code Club」は設立されました。「小学校でプログラミング教育が必修化されたことを受け、プログラミングスクールが急増したものの、どうしても高額な習い事になってしまい、新たな教育格差につながってしまうことに危機感を抱いた」と石川氏は言います。

設立当初は、対面で無料のプログラミングイベントなどを実施していたKids



Code Clubに、転機が訪れたのは2020年。新型コロナウイルス感染症の流行をきっかけに、すべての活動をオンラインに移行したことでした。

Zoomで画面越しに一方向的に教えるような形態での運営に物足りなさを感じていたところ、アバターでバーチャル空間に入って交流する『oVice(オヴィス)』というプラットフォームに出会い、Kids Code Clubで採用。2020年11月に放課後プログラミングクラブをこのoVice上で展開し始めたところ、日本全国はもちろん、海外からも多様な子どもたちが集まるようになり、「貧困だけでなく、不登校や発達障害、海外ルーツ、病気などさまざまな課題を抱える子どもたちが自然と集まってきました。必要性を感じてサード・プレイスを始めたというよりも、サード・プレイスを始めたら必要とする人が集まってきたという感覚です。」と石川氏は振り返ります。

運用し続ける中で、課題を抱える子どもたちの中にデジタルクリエイティブやIT面の才能を開花させる子がたくさんいることに気づいたという石川氏。ピア・ラーニング形式の環境を整えたところ、想像以上に子ども同士で学びあう力があることがわかったのだと言います。また、最初は黙っているだけの子どもが徐々に活発になっていくといった事例も多数あり、「学びあいの場が、デジタルスキルだけでなく社会性や自信を育むことにつながることに気づかされました。このような機会をもっと拡大し、誰でも参加できるインフラのようなものにしていかなければならないと感じ、放課後プログラミングクラブを運営してきました。」(石川氏)

不登校や発達障害などの課題を抱える多様な子どもが放課後プログラミングクラブで夢中になれる理由は、次の3つにあると石川氏は指摘します。

1. 自分が好きなこと・興味のあることに取り組める。
2. 評価されず否定もされない、できないからといって怒られることもない、参加の義務もない。正解がなく、自分の好きなことにマイペースで取り組める。
3. 日常のリアルな人間関係と異なり、学校では引っ込み思案でも放課後プログラミングクラブでは積極的になれるなど、アイデンティティを再構築できる。

また、不登校の子が学校に復帰して、得意なプログラミングやデザインに係活動に貢献するなど、放課後プログラミングクラブで育んだ自信や経験が現実世界に良い形で反映されていく事例が多数出てきているそうです。

### サード・プレイスは資金作りがネック

一方で、サード・プレイスは資金作りがネックとなり、自走・普及が進まない傾向にあります。

Kids Code Club は非営利団体です。非営利団体の資金調達は、「助成金」「寄付」「収益事業」の3本柱のバランスをとることが重要だと言われていますが、Kids Code Club を含め多くの非営利団体が、収入の大部分を期限付きの助成に依存している状況です。助成金を得ながら受益者のための事業を行い、寄付を集める土台を作って、収益事業を開発して、組織基盤を整えるといったことを同時に進めなければなりません。

「『すべての子どもたちがオンラインで居心地よく過ごせる居場所のようなインフラを構築したい』という夢を実現するには、不安定な資金状況の中で急ピッチに組織を構築する必要があります。さらに、我々の場合はITを活用しているため、技術開発への投資が必要です。しかし、技術開発への投資の必要性を理解してくれる助成金はまだ少なく、生活支援や学習支援と比べてIT教育は優先度が下がってしまいがちです。」と石川氏は言います。そこでKids Code Club がたどり着いたのが、公益財団法人日本財団(以下、日本

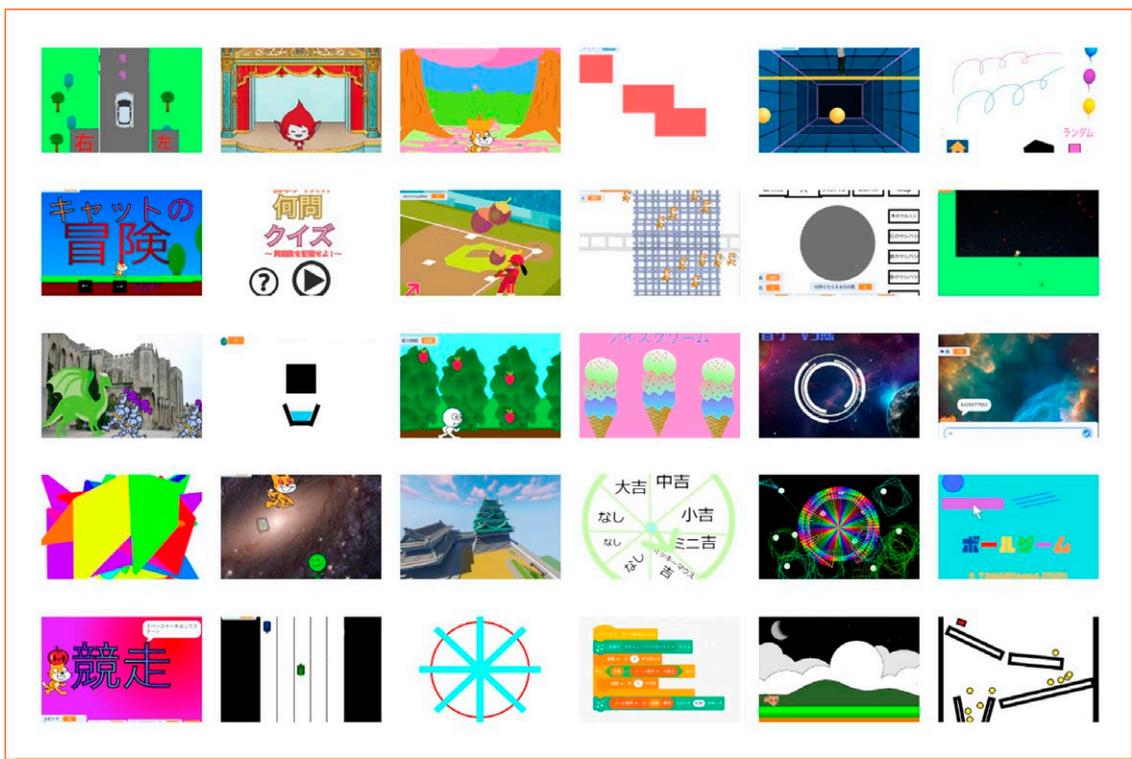
財団)の「助成金」でした。

### 日本財団からの支援により、自走への道筋が鮮明に

日本財団は、NPOをはじめ非営利団体に助成しています。2023年度、Kids Code Club の取組に対し日本財団は助成を決定し、定期的に進捗状況のヒアリングを行い、収益事業や今後の自立に向けた見通しなどを話し合いながら進めています。

「単発の事業に対してだけではなく、組織基盤に対する支援も受けているので、中長期的な経営計画を立てられるようになりました。それによって、良い人材やパートナーを獲得でき、協力者や外部団体などステークホルダーが増えていきます。受益者はもちろん、日本財団から支援を受けている他の団体との連携など、関係人口が増えて規模が拡大しています。」と石川氏は言います。

日本財団の高田氏は、「Kids Code Club への助成は、人件費などの組織運営に関わる費用の割合が大きいので、自



立・自走に向けた基盤を強化できるのではないか」と指摘。これに対し石川氏は、「日本財団からの支援により、他のサード・プレイスへの横展開も実証しています。このサード・プレイスでの実証事業が、学校や放課後等デイサービスなど公的機関へのサービス化や商品開発へとつながり、収益事業化することで、自立への足がかりにしていければと思っています。」と今後の抱負を語りました。

日本財団は現在、貧困や発達障害、不登校などさまざまな困難を抱えた子どもたちのために、放課後のリアルな居場所を提供する事業を行っており、その数は全国250か所にのぼります。一方で、リアルな居場所から発展的な学びにアクセスできるとも限らず、地域の事情や運営団体のスキルなどによるところが大きいといった実情もあります。そのような中で、日本財団の高田氏は、Kids Code Clubの取組を「社会的な価値が非常に高い」と評価し、「子どもたちが全国どこからでも好きな時にアクセスできるサード・プレイスを一緒に作りあげたい」と意気込みます。



今後の展望について、Kids Code Clubの石川氏は、「AIの力を借りたい」と語ります。

「未来の教室実証事業で開発したシステムには『AIによるサポート機能』を実装しています。たとえば、子どもたちが活動中にわからないことがあった時、子ども自身がAIを活用して解決したり、自分の作品に対するアドバイスをAIに求めたりすることができます。AIが技術的な課題を解決してくれれば、スタッフやボランティアは子どもたちの心のケアにもっと集中できるはず。さらに今後は、課題を抱える子どもを支援する他の団体にもノウハウを展開することで、より多くの子どもたちがIT

を通じてワクワクしながら成長していけるエコシステムを作りたいと考えています。」(石川氏)

日本財団の高田氏は、「これまでの高校・大学への進学を下支えするような学習への支援だけでなく、従来型の学習にとらわれない、ITを活用した学びを推進していきたい」と述べ、Kids Code Clubの成功事例が、全国への普及につながるロールモデルになってくれたらと期待を寄せました。

継続的な資金確保の道筋が見えてきたKids Code Clubの取組事例は、サード・プレイスが自走・普及していくためのヒントになりそうです。



事業者名：Kids Code Club

公式サイト：<https://kidscodeclub.jp/>

記事で紹介した  
実証事業の詳細はこちら



1人1台端末と様々な  
EdTechを活用した  
新しい学び方はこちら



学校BPR  
学校における働き方改革



未来の教室通信



**？ 未来の教室ってなに？** 経済産業省の有識者会議「『未来の教室』とEdTech研究会」では、新しい学習指導要領にもとづき2020年代に実現したい「今を前提にしない学びの姿」を、「未来の教室ビジョン」にまとめました。その議論の内容は、ウェブサイト「『未来の教室』の目指す姿」をご覧ください。



「未来の教室」通信

発行：経済産業省 商務・サービスグループサービス政策課 教育産業室 Tel: 03-3580-3922

Facebook: <https://www.facebook.com/METI.learninginnovation/>

公式サイト: <https://www.learning-innovation.go.jp/>

未来の教室 検索

記事の  
定期配信は  
こちら

